来ないや！鳥取の民家へ

「民家フォーラム2014 in 鳥取」レポート

於：鳥取県琴浦町・大山町

2014年11月1日・2日

小倉誠一鳥取県地域振興部部長

公文大輔代表理事

山下一郎琴浦町長

北村裕寿実行委員長

「民家フォーラム2014 in 鳥取」は11月1日、2日にわたり鳥取県東伯郡琴浦町と大山（だいせん）町で開催されました。

1日目のシンポジウムおよび民家まつりは、鳥取県内から、そして全国各地から参加者が会場の琴浦町農業者トレーニングセンターに集まるなか、白鳳太鼓の上演で幕を開けました。

まず北村裕寿実行委員長から「日本海、大山の素晴らしさを地元の方に再発見していただきたい」「両町の移住定住の促進を県外に発信したい」と力強い開会宣言がありました。

続いて山下一郎琴浦町長からは「全国から琴浦町に来てくださり心から感謝します。古民家を魅力的なものにして、それが未来志向の取り組みになることを期待しています」との歓迎の言葉をいただきました。

公文大輔代表理事から関係者へのお礼、JMRAの活動紹介に続き、大林宣彦会長の「いま僕らが民家再生を願うのは、そこにこそ現代の僕らが失った『日本人の心』が潜んでいる、と信じられるからなのでしょう」とのメッセージが紹介されました。

鳥取県地域振興部部長の小倉誠一氏からは「鳥取県は地方再生に向け移住定住を進めています。その一翼を担うのが民家で、その魅力に期待しています」との激励の言葉をいただきました。

シンポジウムは佐藤彰啓氏による基調講演に続き、地元団体の活動報告。続いて「移住・定住促進に役立てる空き家の再生と活用」をテーマにパネルディスカッションが行われました。

「民家まつり」は、民家再生無料相談会、移住定住相談、曳家パネル展示、木材加工実演、柿渋塗りや一閑（いっかん）張り、古民具の手作り体験などが行われ、家族連れにも人気でした。

懇親会は米子市のGaleria大正蔵で開かれ、全国から集まった会員100名が懇親を深めました。ここでは第9回民家再生奨励賞の表彰式も行われました。

準備に1年以上かけた実行委員会、関係者の思いが実を結んだフォーラムになりました。翌日のオプショナルツアーでは38名の参加者が地域の4か所を巡り、取り組みを見学しました。

シンポジウム

第1部 基調講演と地元団体からの活動報告

基調講演

民家を生かした魅力的な地域づくり

ふるさと情報館代表　佐藤彰啓

シンポジウムの第1部は、この地域の伝統的な民家および歴史的文化財を地域づくりにどう生かしていくかがテーマです。最初に私から地域づくりをめぐる最近の状況をお話しいたします。

そして、今日はこの琴浦町、大山町で歴史的な文化財を生かしていろいろな活動をなさっておられる団体の方々にお出でいただいていますので、後ほどそれぞれの団体から活動報告をしていただきます。

●全国で523市町村が消滅する恐れ

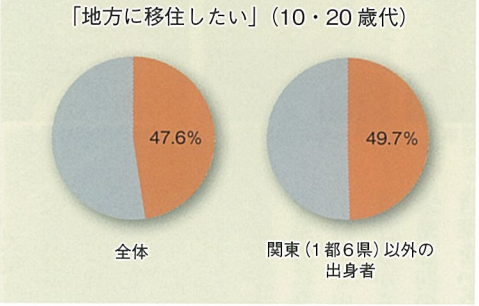
いま政治の場では「地方創生」が大きなテーマになっています。少子高齢化、増え続ける空き家、遊休の土地が増え里山が荒れてくるという状況が全国各地で出ていて、それへの対策が緊急課題とされています。2014年の5月に日本創成会議の人口減少問題検討分科会が、25年後の2040年には20～39歳の女性の半減により全国の約1800市町村のうち523の市町村が消滅の恐れがあるという非常にショッキングなデータを公表しました。そして、東京一極集中を是正して地方を創生することが緊急の課題だと提言しています。

お隣の島根県では中山間地域研究センターが中山間地の調査をやっていて、4歳以下の人口が5年前に比べて増えていることが分かっています。これは、これまで県が定住促進をやってきた成果ですが、この調査をもとに試算して、人口千人に対して毎年30歳前後の2組の夫婦が定住すれば地域の人口は減らないという指標を出しています。琴平町と大山町の人口はそれぞれ約1万7千人前後ですから、毎年34組の若い夫婦が定住すれば人口は維持されるということになります。ですから、これからどうやって都会の人に来てもらうか、その若い人たちと地域をどうつくっていくかが課題になります。これは全国に共通することです。

●東京の若い人の半数が移住を希望

一方、都会のほうはどうかというと、今年8月に総務省が東京在住者の意向調査をやりました。10代、20代の若い人を対象に地方に移住する希望があるかどうかを尋ねたところ、移住したいと答えた人が46・7％、関東以外の出身者に限ると49・7％ということで、いま東京の若い人のほぼ半数が地方に移り住みたいと考えています。東京の有楽町にふるさと回帰支援センターというのがありますが、ここで県や市町村が定住相談を行っており、相談に訪れる人の数が2008年の2900人から2013年には1万800人に増えています。年齢構成を見ると、40歳以下の人の割合が2008年に30％だったのが2013年には54％と若い人の相談が大幅に増えています。

東京在住の若者の半数が地方移住を志向



「東京在住者の地方移住に関する意識調査」（2014年8月、総務省）

都会の人に魅力ある地域とは

- 自然豊かな農山漁村
- 地元の人々が誇りを持って暮らしているところ
- 地域の歴史と文化のあるところ
- 地域の「特産品」のあるところ
- 温かく迎え入れてくれるところ

どうして都会の若い人が地方に移り住むことを望んでいるのか、その社会的背景についてひとことで言うと、都会が快適な場所でなくなったということです。1992年にバブル経済が崩壊して日本経済は20年間不況が続いてきました。そのなかで経済的豊かさを求めることに行き詰まりが出てきたのです。それとともに、生活のあり方も変わってきました。スローフード、スローライフの生き方を求め、田舎に移り住みたいという人が広範に出てきました。都会の人間関係もバブル崩壊前とは大きく変わっています。

農山村は相互扶助、助け合いのむら社会ですが、日本の都会は高度経済期以降、地域社会が発展しないまま急速に人口が増加したためにヨーロッパのような都市社会は形成されずに、地域よりも会社とのつながりが非常に強い会社社会になりました。終身雇用であり、社員の保養施設もあり、福利厚生も行き届く。定年後は子会社で働き、その後はOB会で人間的つながりを続け、一生を終えると

いうのが都会のサラリーマンの一生でした。それが、バブル崩壊後はリストラが始まり、退職金が減額され、早期退職を迫られる。いつ職を失うかわからないという精神的ストレスの非常に高い都会になったのです。いま都会では、働く人の3分の1が派遣社員で、若い人たちは夢も希望も感じられなくなっています。ですから、都会ではなくて、自分たちの力を地方に出て試してみたいという人たちがたいへん増えてきました。それが、先ほどお話ししたようにデータとして出てきているのです。

ヨーロッパでは田舎で暮らすことが社会的ステータスとなっています。ロンドンのサラリーマンに「あなたの将来の夢は？」と聞きますと、異口同音に「ファーマーになりたい」と言います。ファーマーと言っても、農業者ではなくて、自家菜園で野菜をつくりガーデニングをするという暮らしです。これはフランスでもドイツでも同じです。社会が成熟期を迎えると、都会から田舎へという動きが出てくるのですが、日本も成熟した国になってきたのだと思います。

●都会の人が魅力を感ずる地域とは

都会の人たちがどんな地域に魅力を感じているかというと、いくつかあります。第1に、自然豊かな農山漁村。そこには山に雨が降り、森や平野に恵みをもたらし、豊かな漁場をつくるという自然の循環があります。人はひとつの生命体ですから、そういう自然の中で暮らしたいと望みます。2番目は、地元の人々が誇りを持って暮らしているところです。「ここは何にもないところだ」と下を向いて暮らしているようなところには魅力を感じません。地元の人たちがよいコミュニティを作ろうとさまざまな取り組みをしているところに行ってみたいのです。3番目は、地域の歴史と文化のあるところ。歴史や文化はどこにもあるのですが、地域の人たちが祖先がつくり上げてきた郷土を見つめ直しながら新しい地域づくりをしているところです。4番目に、地域の特産品があるところ。どこにも山の幸、海の幸はありますが、それらを特産品として育て地域の活性化に生かしているところです。5番目は、温かく迎え入れてくれるところです。集落には入りづらいということがこれまではありました。しかし、都会から来る人たちはそこが好きで自分の意志で選んで来ているのですから、地域の一員として温かく迎え入れてくれるところを望んでいるのです。

ここの地域は自然が豊かで、人々が生き生きと暮らしています。そして、民家をはじめ歴史的文化財がたくさんあり、それらを守り生かしていこうという団体が活発に活動しています。各団体の方から活動報告をしていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

地元団体からの報告

所子（ところご）町並み保存会会長 門脇晃三さん

2013年12月に伝統的建造物群保存地区に選定されました。全国で108の伝建地区があるなかで所子は平地の農村集落としては最初の選定です。68戸、250人弱の小さな集落です。保存会ができてまだ8か月ですが、ようやく建物の修理・修景作業に取り掛かるメドがついたところです。また、住民によるガイドが始まり団体の来訪者が増えています。私たちは祖先から引き継いだ立派な環境のもとに生まれ育ったことに誇りを持ち、これを後世に伝えていく使命を痛切に感じています。青々とした潤いに満ちた田園風景と修理・修景のすすんだ所子にしかない町並みの光景を心に描いて今後の事業に取り組んでまいります。

光（みつ）むらづくり協議会会長 豊嶋亥三男さん

光集落は鍋絵（こてえ）の密度が日本一ということで脚光を浴びています。47戸のうち主屋8棟、土蔵20棟に鍋絵があります。協議会は景観保存と住みよい環境づくりを目的に2007年に発足しました。行政の補助を受けて、鍋絵となまこ壁の修理、建物の塀など修景の事業を現在行っています。観光客が年々増えていて2013年度にはガイドの申し込みがあった団体だけの集計で1300人、このほか個人やグループで来られる方が多数います。トイレや駐車場はできましたが、これからは休憩場所や民宿、鍋絵体験施設などを整備していきたいと考えています。

河本家保存会会長 小谷恵造さん

10年ほど前に保存会をつくりました。膨大な量の古文書の調査を始めて、河本家が1688年の建築であることが分かりました。毎年、春と秋に公開日を設けていましたが、2010年に国の重要文化財に指定されてから公開日以外にも多くの見学者がみえるようになったため、公開日の企画を一新する必要が出てきました。2014年秋の公開では、新しい試みとして全国組織の手工芸の会による作品展を開催しました。主催者の方から伝統的な建物の中でぜひやりたいと申し出があって実現したものです。たいへん好評でしたので、今後はこうした形での活用

を考え、多くの方に来ていただきたいと考えています。

河本家当主
河本雅通さん

重要文化財に指定されてから、県外からの見学者が増えました。その方たちが異口同音に「住んでおられるのですか」と質問されます。私は16代目に当たります。昔は回船問屋をやっていたらしいのですが、琴浦に移ってきた5代目以降は庄屋です。民家に住んでいて感じることは、日本人は自然を強く吸収しているということです。最近は、和歌にある言葉に心を惹かれます。

NPO塩谷定好（しおたにていこう）フォトプロジェクト
事務局長　塩谷晋さん

このNPOは設立からまだ2年です。記念館は塩谷定好という写真家の生家です。定好は昭和初期に活躍した写真家で、芸術写真の分野で世界的にも知られています。塩谷家は代々回船問屋でしたが、この建物は明治39年の建築です。記念館の目的は半分は写真ファンの方に来ていただくこと、もう半分は古民家ファンの方に明治後期の建築物を見ていただくことです。開館して半年ですが、来館者が4千人にのぼっています。このNPOは琴浦町をなんとか元気にしたいとの地元愛から立ち上げた団体で、私たちボランティアで記念館を運営しています。

佐藤　各団体の活動報告をいただき、ありがとうございました。

今日みなさんのお話をうかがっていて、民家や文化財は地域の風土や暮らしと密接につながっているのだということを強く感じました。所子の集落にしても光集落にしても、そこには豊かな歴史と文化があります。所子には重文の門脇家をはじめ歴史ある家々があり、かつてのむらの暮らしを引き継いでそれらを次代につなごうと活動を始めています。光では鏝絵を施した蔵が各家にあり、それらを地域の文化として守り、観光に訪れる人たちに楽しんでもらおうと集落が力を合わせて修景や設備整備に取り組んでいます。

河本家住宅には大量の古文書が残されていますが、それを読み取ることがたいへんです。その作業は保存会の会員が進めていて、そのように地域の人たちに支えられている建物は幸せだなと感じました。また、ご当主のお話を聞いて、歴史ある建物を引き継いでいくことは精神的にも大変なことだと思いましたが、それを支えているのはボランティアのみなさんです。

塩谷定好写真記念館でも、ボランティアのみなさんが楽しくやっていることに感心しました。この建物は塩谷家がNPOに寄付しているのですが、行政が引き受けていたらボランティアの力をこれだけ引き出すことはできないだろうと思います。塩谷さんは「ここと同じように民間の力で運営して民家を活用する例がこの地域に増えるといい」と言っておられます。お金をたくさんかけて公共施設をつくるより、民家を活用して地域の人たちの生活や交流の場にしていくことは素晴らしいと思います。

活動報告を聞いて、いちばん大事なのは、そこに住まう人たちが自分たちの地域をどうするのかを考えていくことだと感じました。建造物だけでなく、それを生み出してきた地域の力をもう一度見直すことによってこれからの活動のあり方が見えてくるのではないかと思います。

第2部　パネルディスカッション

移住定住に役立てる空き家の再生と活用

コーディネーター　佐藤彰啓

佐藤　今日は、移住定住の事業を進めている琴浦町と大山町の役場の方、役場と連携して活動している民間の組織の方、それからこの地域に移住された方に来ていただいています。まず、町の取り組みと支援団体の活動についてそれぞれ報告をお願いします。

松井明宏（大山町企画情報課）　大山町では2007年に空き家バンクを始め、空き家の実態調査もやってきました。2013年には役場に移住定住促進の選任相談員を置いて、Iターン、Uターンの相談に応えています。また同年の10月からは民間の移住交流サテライトセンターと連携し、責任者には後ほど報告される中村隆行さんになっていただき、空き家登録の推進、移住者への相談を行っています。行政では立ち入ることができない部分を民間の方にお願いすることで、これまでにない成果が出てきています。2013年度には4組12名、2014年度には空き家の賃貸または売買により8組20名の定住が進んでいます。しかし、町内には300軒の空き家があり、27軒が登録されているのですが、今すぐ住める空き家がないために利用登録者の希望に十分応えられないという残念な状況があります。中村さんと一緒に空き家活用について町民のみなさんの理解を求めるとともに、移住希望者には町の研修宿泊施設に泊まっていただき、大山町の良さを知ってもらうことに努めています。

北村裕寿（「築き会」代表）　「築き会」はIターン、Uターンの若手起業家が中心となって地域の活性化のために2011年に設立した団体です。空き

家になっていた医院の建物を再生し、そこを活動拠点にしています。この建物は、持ち主の方に私たちがお願いをした結果、「地域のために使ってくれるなら」と町に寄付されたもので、私たちが町から借り受け、「まぶや」と名付けて地域の交流センターとして、また町からの業務委託された移住交流センターとして使っています。

中村隆行（大山町移住交流サテライトセンター責任者）　埼玉県の出身です。13年前、素潜りをすごくやりたくて鳥取県に移住し、素潜りの漁をやっています。こちらのみなさんの温かい人柄に感動して、サテライトセンターの責任者を引き受けています。私自身県外から移住した者ですから、移住希望者の要望や悩みが分かり、お役に立っているのかなと思っています。

池口由美子（琴浦町商工観光課）　琴浦町も少子化や、働く場の減少による若者の県外流出により人口が減っています。そのことで地域の活力が損なわれるので、移住定住事業に取り組んできました。２０１３年には専従の移住定住アドバイザーとして職員1人を置いています。同時に、古い民家をお試し住宅にリフォームし、移住希望者に利用してもらっています。しかし、空き家登録7軒に対して利用希望者は70人いるので、空き家の登録をもっと増やしたいとがんばっているところです。２０１４年からは宅地建物取引協会と提携し、空き家以外の情報も提供できるようになりました。

馬野慎一郎（コトウラ暮らし応援団会長）　移住を考えている方、すでに移住定住している方を応援するため、２０１３年に琴浦町の会社や地元の有志の方々で応援団を立ち上げました。移住定住という大きな課題を進めるのに役場だけでなく、町民全体で「琴浦町にようこそ」と言えることこそ重要ではないかと考えて取り組んでいます。具体的には、不動産業の会員もいますので、空き家の登録、空き家情報の提供に協力いただいています。また、地元のケーブルテレビに協力をお願いし、毎月「琴浦暮らし特集」を制作してもらっています。移住された方を取材し、移住定住について町民の理解を広げようと努めています。また、移住された方には交流会を開いて暮らしについての要望を伺っており、今後の活動に生かしていきたいと考えています。

佐藤　引き続いて、移住された方から、その動機や移住後の暮らしについておうかがいしたいと思います。

小林清美（琴浦町在住）　２００９年に大阪から来ました。その2年前、テレビで琴浦町を取り上げた番組を見て、「なんていいところなんだろう。定年になったら引っ越したいな」と思ったのです。ここに来てびっくりしたのは、水がカルキ臭くないこと、食べ物は地産地消で安心して食べられることでした。特に魚は漁港があって新鮮ですし、野菜もおいしいです。鳥取の良さを知って、2年後には2人の娘も大阪での仕事を辞めて引っ越してきました。1人はたまたま仕事に就けましたが、仕事がないと若い人は大変だと思います。大雪にも驚きましたが、自然の中でおいしい水と空気と安全な食べ物があって、家族も喜んでいるので、こちらに来て正解だったなと思っています。住宅は県公社の分譲地ですが、家を建てるとき町から１１０万円の助成があってありがたかったです。

島本悠介（大山町在住）　２０１２年に兵庫県の姫路市から妻と当時2歳の子どもと犬2匹と一緒に移って来ました。田舎の環境のいいなかで子どもを育てたいというのが夫婦共通の思いだったので、子どもができると分かって決めました。町の分譲地を見に来たとき、姫路ではビルがいっぱいなのに、ここは空がこんなに広いのかと感激しました。近くに保育園があって、古い校舎を生かした木造で、運動場は広くて全部芝生の素晴らしい環境です。私たちの子どももここでお世話になり、毎日はだしで飛び回っています。移住を決断したことに、今は納得しています。仕事の方は、定置網漁業の乗組員として働いています。

熊崎隆（琴浦町在住）　東京から来て14年になります。私は農山村ボランティアでナシ作りを体験し、面白いと思って定住を決め、ナシの栽培をしています。最初の5年間はＪＡの方に指導をいただきました。こちらで結婚し、子どもが3人できました。自然が豊かな環境でのびのび子育てができています。こちらに来てまず感じたのは地域の人たちの温かさです。東京で結婚式を挙げて帰ってきたときに家の前に「祝御婚礼」の横断幕が掲げられてあり、とても驚きました。休日には家族で出かけますし、すぐ近くの海で魚がよく釣れます。私が憂えるのは、農業をする人が減ってきていることです。しかし、これからは高齢化で空いた畑も出てくるし、よい品種や栽培技術も誕生しているので、農業を始めるにはいいタイミングだと思います。農業は自然が相

手ですので大変なこともありますが、やりがいのある面白い仕事だと思います。

金平坦（琴浦町在住） 72歳になります。琴浦町から都会に出てサラリーマンとして企業戦士の時代を過ごし、定年後に戻ってきました。家は築約140年の茅葺きで、この地域で残っているのはわが家1軒だけです。茅葺き農家は地域の農村風景のシンボル的存在でしたから、これからも残していかなければいけないと思っています。私が出た中学校の卒業生名簿で住所を見ると、県外、県内の市町村、町内がそれぞれ3分の1です。県外の人は望郷の念がたいへん強くて、戻らないまでも郷里のために貢献したいと考えています。この人たちの思いを地域活性化にどう生かすか、行政が町全体挙げて取り組んでいただければありがたい。移住定住をすすめるときに、田舎はおしゃれでなくてはいけないというのが私の思いです。ただし、地元の人と都会の人ではおしゃれの内容がまったく違うので、お互い理解し合うことが必要です。そうすればもっと多くの人が移り住んで、豊かな地域になると信じています。

佐藤 ありがとうございました。いま全国で空き家が住宅全体の13%で、とくにこの周辺では2割ぐらいが空き家です。ところが、空き家があってもなかなか貸してもらえない、譲ってもらえないという問題がありますね。

松井 田舎では、他所から来る人に警戒感がまだまだあります。その点は解消していかなければいけないと考えているところです。また、空き家だけれど貸すことができる状態でないという問題もあります。もっと早い段階で相談していただけば、いい状態で賃貸や売買ができるのですが、人が住んでいないために土台がだいぶ傷んでいて修繕費が相当かかる例があります。でも、空き家のいい活用事例を重ねていくことで、早めの相談でいい結果を出すことができると思っています。

佐藤 空き家をどうするかは、所有者だけの問題ではなく、地域の環境の問題でもありますね。

池口 琴浦町では、空き家の所有者にも奨励金を出す制度ができていて、空き家を整備してそこに人が入ったときに支払うようになっています。しかし、移住したくても住む家がないという声を聞きますので、空き家を持っている方には次の世代のことも考えて廃屋にならないよう登録を働きかけています。

佐藤 空き家は地域の資産として活用することもできれば、逆に地域の大きな重荷になる可能性もあります。空き家対策は美しい地域づくりと密接につながってきます。役場だけでなく、区長さんはじめ地域で話し合いをしていい方法を考えていく必要があります。

民家の活用についてですが、中村さんは民家を手に入れ、再生して住んでおられると聞きました。どのような経過ですか。

中村 私は町営住宅に住んでいたのですが、漁師の先輩が「2年ぐらい空き家になっているのだが、だれか使う人はいないかな」と話してくれたのです。この家を見て驚きました。土地は176坪あって、都会なら1億円以上する家です。当地の評価額より少し安くしていただいて買いました。蔵も付いていて、これだけ立派な建物であるからには、しっかり使わせてもらおうと水産加工品を作って販売しています。民家ですから、たたずまいがしっかりしていて空間を感ずることができて幸せです。

中村さんが暮らす民家と蔵

北村 家の価値ということから考えれば、太い木を使って建てた民家を壊して、新建材を使った家に建て替えるのはどうかと思います。私たちが再生した「まぶや」の建物などは、地元の木を使った得難い造りで、今の職人さんの何倍かの手間をかけた価値があります。日本の木造建築の技術は世界的に見ても素晴らしいと言われていますが、その価値を地域の人が感じながら守っていく。同時に、日本の原風景と言われる景観についても守っていくことが必要だと思います。

中村 私のところも北村さんに再生工事をやっていただきました。民家を残すのは「古材の新築」と言われるくらい大変なことで、一人の力ではできません。ですから、残そうという気持ちが少しでもあったら、それを仲間で共有してみんなで話し合う場をつくるとか、できるところから一歩行動してみることが大事ではないかと考えます。

松井 東京の相談会で聞いたのですが、住居と職が見つかればすぐにでも行きたいという人が多くいます。ですから、受け皿として民家を朽ちていく前に利用していきたいし、それは集落の活性化にもつながるということを訴えていきたいと思っています。

佐藤 みなさん、この地域をどのようにしていくかを真剣に考えていて、人と人とのつながりがたいへん豊かなところだと痛切に感じました。それが新しい地域をつくっていくのだろうと思います。都会の人にもっと来ていただいて、地元の人とのいい出会いがあっていっそう素晴らしい地域になることを期待しながら、今日のシンポジウムを終わりにしたいと思います。

（まとめ　編集部・清沢和弘）